



LISZT FRIENDS

特定非営利活動法人 リスト音楽院友の会 会報
No. 12

2014年 10月 30日発行

発行元：
特定非営利活動法人 リスト音楽院友の会

〒500-8879 岐阜市徹明通1丁目9番地
TEL 058-264-1501 FAX 058-262-8011
E-mail: kota@lisztfriends.com
URL: http://www.lisztfriends.com

NPO法人設立8年目にして思う



当会が2007年6月にNPO法人となりました際に、理事を拝命して8年目となります。私は愛知県にいますビジネス系専門学校の校長をしております。学生たちに、活動を通じてクラシック音楽の楽しさ、素晴らしさを伝えることができるとの思いで参画させていただいています。ジャンルを問わず音楽大好き人間ではありますが、クラシック音楽の知識につきましては、さほど深いわけではありません。

さて、この7年余に主催コンサートが24回。素晴らしい成果だと思います。このことは、出演していただいた演奏家の皆様はもちろんですが、会長をはじめ会員の方々のご努力とご協力によるものと思っております。

今後は10周年に向け、皆様方のさらなるご協力をいただきまして、当会がますます発展していくことを期待しています。

NPO法人 リスト音楽院友の会
理事 浅野 諭

2014年度通常総会議事録(要旨)

日時：2014年5月18日 午後12時30分～午後1時00分 場所：真鍋記念館クララザール
出席者：正会員数58名。出席者25名(うち表決委任者21名)。

議事の経過の概要及び議決の結果：

- (1) 事務局長・太田功正が本日の総会は、定足数を満たして有効に成立している旨を述べ、開会を宣言した。
- (2) 議長に会長・矢島潤一郎が全会一致で選出された。
- (3) 議長より、議事録署名人に奥住信治と太田功正を選任したいとの提案があり、承認された。
- (4) 矢島潤一郎会長より、平成25年度の事業報告並びに活動計算書決算について報告があり、太田事務局長より説明があった。監事の奥住信治より監査報告があり、全会一致で承認された。
- (5) 矢島会長より役員を選出について提案があり、理事に矢島潤一郎、古川展生、太田功正、浅野諭、新井康之、佐部利弦、監事に奥住信治の各氏が再任された。理事のうち矢島潤一郎が会長に、古川展生が副会長に、太田功正が事務局長に選ばれた(全員再任)。役員報酬については、「なし」とした。なお、任期は平成26年4月1日より平成27年3月31日までの1年間である。
- (6) 矢島会長より、平成26年度の事業計画並びに活動予算の提案があり、太田事務局長より説明があったのち、全会一致で承認された。

2014年度の主催コンサート<終了報告>

リスト音楽院フェスティバル2014

～卓越した技巧と美しい叙情のピアノトリオの調べ～

2014年5月18日(日) 14時開演
真鍋記念館クララザール(岐阜市)

出演：辻和余(ヴァイオリン)、山田真吾(チェロ)、
五島史誉(ピアノ)

曲目：ハイドン：ピアノ三重奏曲 第25番「ジプシートリオ」
ヘンデル＝ハルヴォルセン：パッサカリア
リスト：コンソレーション 第3番
シューマン＝リスト：春の夜
チャイコフスキー：ピアノ三重奏曲 イ短調 作品50
「偉大なる芸術家の思い出」



毎年開催している「リスト音楽院フェスティバル」シリーズ。今年は5月に開催しました。会場は、おなじみの真鍋記念会館クララザール（岐阜市）。この秋で閉館が決まり、当会がこの会場のできる最後のコンサートです。辻和余（ヴァイオリン）、山田真吾（チェロ）、五島史誉（ピアノ）3人による美しい調べがホールいっぱいに響きわたり、150人の聴衆を魅了しました。

辻さんは、岐阜市のご出身で名古屋音楽大学卒業、リスト音楽院マスターコースを受講、リスト音楽院留学選考会合格。大学卒業後、音楽企画会社を立ち上げ、様々な場面で音楽を提供しておられます。

五島さんは岐阜県大垣市ご出身で、ドイツとイタリアに留学。リスト音楽院マスターコースの伴奏を務め、現在は演奏活動のほか後進の育成にも力を注がれています。

そしてチェリストの山田さんは、岐阜大学工学部を卒業後、リスト音楽院に留学。帰国後、セントラル愛知交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団との共演、数々の室内楽コンサートに出演など、多方面で活躍されています。

コンサートは、ハイドンのピアノ三重奏曲「ジブシートリオ」から始まりました。第3楽章のハンガリー風ロンドは、さすがに聴かせます。次に、辻さんと山田さんの「パッサカリア」。本来ピオラのパートをチェロで演奏。細かいパッセージを見事に弾きこなしていました。次いでピアノソロで、リストの曲・2曲を叙情豊かに表現していました。

後半はチャイコフスキーのピアノ三重奏曲「偉大なる芸術家の思い出」。この長い曲を、矢継ぎ早に奏でる美しいメロディー杯に、最後まで弾き通したときには、方々から声がかかり満場の拍手でした。山田さんの表情には、長丁場を乗り切った安堵の様子が伺えます。

アンコールにはショスタコービッチの第2ワルツ。トリオに編曲されたもので、3拍子のリズムにのって、楽しく聴かせました。



さようなら クララザール ありがとう



当会が「リスト音楽院フェスティバル」シリーズのコンサートを毎年のように開催してきました岐阜市のクラシック音楽専用ホール「真鍋記念会館クララザール」は2014年10月12日のコンサートを最後に閉館いたしました。

中部建築賞も受賞したレンガ造りの建物に約150席。23年間クラシックの楽しみを伝え続けてきました。

音響の良いホールは、当会の副会長・古川展生氏をはじめ、演奏家が録音スタジオとして活用するほどでした。また、ウィーンフィルの首席奏者が訪れたり、地元音楽家の発表の場にもなるなど、クラシック音楽振興に貢献してきました。

しかし、館長の真鍋みさおさんが高齢となり、運営の継続が難しくなりました。閉館を惜しむ声が多い中、運営の継続や建物の活用を検討する申し出も寄せられていますが、見通しは立っていません。

真鍋さんは「体力的にも厳しくなり、区切りをつけた。皆さん惜しんでくださるが、後のことはまだきまっていない。今まで愛してくれた方々に感謝したい。」と話しています。

2015年度の主催コンサートの予定



リスト音楽院フェスティバル2015

2015年5月24日(日) 14時開演
岐阜県図書館 多目的ホール(岐阜市)
出演: 山田真吾(チェロ)、佐部利弦(ピアノ)

曲目: ラフマニノフ: チェロ・ソナタ ト短調 作品19
他



随 想

リスト音楽院の思い出

山田 真吾

ぎふ・リスト音楽院マスターコースを経て、私は約3年半ハンガリーのリスト音楽院へ留学していました。「1日も早く本場で音楽を学びたい」と考えていた私にとって、ハンガリーで過ごした時間は、素晴らしい先生方、仲間に囲まれとても刺激的でした。マスターコースで師事したオンツァイ先生は、ハンガリーでもとても暖かく、そして厳しくご指導下さいました。今日はそんな留学生生活を少しだけ振り返りたいと思います。

留学生活で最も重要なのはなんと言ってもレッスンです。学生は週1度先生から個人授業を受け、研鑽に励みます。日本でもレッスンは受けて来ましたが、最初のうちはカルチャーショックの連続でした。レッスンまでに勉強しなければならない曲の量が、これまでとは比べ物にならないくらい多かったです。週1回のレッスンで要求される楽曲はソナタなら全楽章、エチュードは3~4曲、協奏曲でも最低2楽章と、初めのうちはついていだけで精一杯でした。それに加えて先生方のレッスンはスピードが早いだけでなく緻密で、毎回のように「目から鱗」のような解釈、技術、フレージングをたくさん教わり、消化するのが大変でした。そしてさらに、チェロ科の学生にはもう一人先生がいました。それはダヴィド・ポッパーです。「チェロ部屋」と呼ばれた音楽院の1室に、昔教鞭を取った彼の肖像画が飾られており、チェロ科の学生は彼に睨まれ見守られて、練習をしたりレッスンを受けていたりしていました。チェリストを志す学生が一度は泣かされる「ポッパーの40の高度技巧練習曲」に取り組んでいた時、先生が「君が間違えても僕は怒らないけど彼は怒るんじゃないかな」と嬉しそうに肖像画を指差していたことを覚えています。ハンガリーはポッパーから始まり、ヤーノシュ・シュタルケル、ミクローシュ・ペレーニなどチェロの巨匠たちを次々輩出したまさにチェロ王国とも呼べる国で、そのような環境で学べることをとても嬉しく感じておりました。

また、リスト音楽院では大ホールで毎日のようにコンサートが行われ、私たち学生はすべて無料で聴くことができ、日本で聴いたらそれこそ何万円もしてしまうであろう巨匠達やオーケストラの演奏をシャワーのように浴びることができました。留学中は、「今日はペレーニのリサイタルがあるから行くか」とその場の勢いで決めていましたが、現在日本に帰って来てからは勉強のために聴きに行く公演は何か月も前からチケットを買っており、時々あの頃のことを懐かしく感じます。さらに、日本では聴く機会ですら極端に少ないオペラも、ハンガリーでは毎日「オペラ座」とよばれるオペラ専用のホールで開催されており、数百円くらいで聴くことができました。オペラのストーリーは悪く言えば「昼ドラ」のようにドロドロしたものから親しみやすいものまで非常に多岐に渡っており、クラシック音楽がさまざまな場面を盛り立てます。ヨーロッパの人々にとってクラシック音楽がとても身近な理由は、オペラにもあると感じました。

このように、音楽的環境を見ても日本とは随分異なりましたが、国民性の違いも随所にありました。リスト音楽院には日本人のみならず世界中の様々な国から留学生が学びに来ていて交流もたくさんあり、彼らと接するうちに、日本人と他の国の人々ではある決定的な違いがあることに気が付きました。それは「身内を褒める」ことです。ハンガリー人はもちろんですが、同じアジア人でも「僕の妻は世界一さ」「うちの息子はとてもチェロが上手なの」「うちの旦那は〇〇と〇〇が得意なのよ」と、日本人なら絶対に言わないようなセリフをよく言っていたのを今でも覚えています。謙遜はもちろん日本人の美しい美德ですが、素直に自分の大切な人を褒め称える姿もとても素敵でした。なかなか日本では言えません。

また、ハンガリー人も普段はシャイですが、室内楽のレッスンなどの真剣勝負の場所になると自分の意見をズバズバ言います。時には先生にも「私はそうは思わない」とはっきり言うためびっくりする事がしばしばありました。いざという時はしっかり議論ができるハンガリー人に、私たち日本人も見習わなければならないと感じた時でした。

もちろん、ハンガリー人の友人も日本人を「約束は必ず守る」「誠実」「綺麗好き」などと賞賛して下さいました。アパートを出るとき、何度もオーナーが「次に入ってくれるのも日本人がいい」とおっしゃって、とても嬉しかったです。

日本人とハンガリー人がお互いの国の素晴らしさを仲間に伝え、両国の交流が一層盛んになることを願ってやみません。素晴らしい環境に導いて下さったマスターコース関係者の皆様、本当にありがとうございました。

ハンガリーと沖縄

大藪 祐歌

3年間、リスト音楽院にて音楽を学び、2006年にハンガリーから帰国しました。帰国後、ハンガリーで知り合った柔道家の沖縄人と結婚し、今は沖縄と出身地の名古屋を行き来しながら演奏や教育活動を行っています。

結婚を機に沖縄に居を移す、と報告した時、皆には「えー！そんな遠いところへ！」とビックリされましたが、私達は、ハンガリーでは首都のブダペストとオーストリアとの国境沿いのソンバトハイとの遠距離恋愛をしており、インターシティ（特急）でも3時間かかる距離を普段、行ったり来たりしていたので、「沖縄？名古屋？同じ日本だし。近い近い！」などと言っていたものでした。

その後、日に馴染んでくると、この距離が非常に煩わしく思ったものなのですが、ハンガリーで流れている時間感覚との違いを痛感しております。

沖縄に住み、この沖縄は日本ではないなあと思うことが多くあります。ハンガリーとも似ていると思うところは、沖縄もハンガリーと同じように、民謡や踊りを愛しているということです。

ハンガリーでは、あらゆるところに民謡があり、ダンスがあり、ハンガリー国民にとってマジャールの民謡やダンスは血のようなものだろうなあと、その生き生きとした様子を見ながらしみじみ思っていました。そのダンスの輪の中に、何の躊躇もなく入り、踊り狂う主人の姿を見つけた時は「この人は一体…」と不思議に思ったものでした。沖縄に住んでみて初めて、踊っている輪に飛び込むことは沖縄人にとって自然なことだと知り、ほっと胸を撫で下ろすとともに、沖縄の人々に非常に興味が出てきました。

例えば、結婚式の披露宴。沖縄では披露宴の参列者は200～300人が普通。宴は「かぎやで風」という、琉球舞踊から始まります。能のようなゆっくりの動きで、非常に難しく思えるものですが、これは主に親族が踊ります。また、宴には必ず余興が2つ3つ含まれており、そこでも友人や同僚、親族による歌や踊りがあり、最後には「カチャーシー」という列席者全員参加の激しい踊りで幕を閉じます。

結婚式の打ち合わせの際、名古屋出身の私は、「かぎやでふう？カチャーシー？」と頭からハテナが出まくりでしたが、とりあえず、まあ何とかなるだろう、と思っていました。しかし終宴に近づいた涙の手紙の後、突然、激しい三線の音楽が鳴り響き、「はい！花嫁さんも踊って！」と舞台上げられカチャーシーを踊らされたので、ドレスなのに、ビックリしました。しかし周りを見ると、我が親族や友人も舞台へ上がり、知らない人々と手と手を取り合い、ワハワハと笑いながらとても楽しそうに踊っていました。それはまるでハンガリーでのダンスの光景。ああ同じだ、とほんやりと思うのでした。

一步、家を出れば、近所のおじさんの奏でる三線の音が響き、民謡が流れてきます。友人に聞くと、小さい頃はお父さんが三線を鳴らしたら子供たちが集まってきて、順番に自由に節と言葉をつけて歌ったそうです。素晴らしい情操教育！！

ハンガリーと沖縄。どこか似ている、と知れば知るほど思います。種類は違えど、同じ血に通った音楽やリズムがあるということ。それは脈々と受け継がれ、人々の心を豊かにする大切なもの。音楽とはそもそもそういうものなのだと実感し、またそんな音楽と共に人生があることを「幸せだなあ」としみじみ思う日々です。

